

氏名	伊藤 友計
ヨミガナ	イトウ トモカズ
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博音第294号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	(論文) J.=Ph. ラモー著『和声の生成』研究

#### 論文等審査委員

主査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	土田 英三郎
副査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	大角 欣矢
副査	東京藝術大学 准教授 (音楽学部)	福中 冬子
副査	東京藝術大学 准教授 (音楽学部)	西間木 真
副査	国立音楽大学 教授 (音楽学部)	久保田 慶一

#### (論文内容の要旨)

本論の考察の主要な対象は、J.=Ph. ラモー (1783-1764) の音楽理論書『和声の生成』(1736年)である。一般にバロックの作曲家として名高いラモーであるが、音楽理論の分野でも『和声論』(1722年)など重要な著作を残し、後の和声学に多大な影響を与えた。『和声の生成』はラモーが生前に公刊した第三作目の理論書であり、当時の科学アカデミーの会員たちを读者として想定し、音楽を科学的に解明することを目的として書かれた、ラモーの主著の一つに挙げられるべき著作である。

当博士論文は全9章から成り、第1章ではそうした『和声の生成』の位置づけと、本論の目的と構成が説明される。

第2章では『和声の生成』に至るまでの音楽家ラモーの経緯がフォローされている。具体的にはラモーの理論書第二作目である『新体系』が発表された1726年から1736年がこの考察の対象である。まず当時の時代背景として18世紀フランスの啓蒙主義の時代が概観され、そしてその中でラモーが精力的に音楽の分野で活躍した様が踏まえられている。そして特にこの期間にラモーが関わった、音楽や音楽理論上の二つの公開論争に注目し、そうした議論や論争の中でラモーが自らの理論の発展・強化に励んだことが考察される。

第3章では『和声の生成』という著作テキストにもつばら焦点があてられている。書誌データ等を確認したのちに、『和声の生成』に登場する人名や用語に注目し解説を加えることで、『和声の生成』の読解に資するようになることが心掛けられている。また用語に関しては『和声論』との比較が行われ、特に考察が必要な用語は個別に検討に付されている。ラモーのテキストでは現在の用例とは異なる用語や名称が散見することがあるが、しかし現在の和声学がそれらの理論書でラモーが描出している和声というフィールドの中に基本的におさまるものであることが確認される。

第4章では音楽理論と科学の接点、特に音響物理学との関わりが論じられている。ラモーは『和声論』脱稿後にJ. ソヴール等の上方倍音に関する研究の知見を得、それが自らの音楽理論に適用可能で、理論を強化するものだと理解・判断した。そのためラモーはこの『和声の生成』を当時に科学アカデミーに上梓することとし、発表当時は事実、フォントネル等から好意的な反応を受けることができた。しかし、倍音現象によってラモーの音楽理論の基礎付けが完璧になされるわけではなく、ここには種々の問題や困難が紛れており、それらはすでにラモーの同時代人たちによって批判にさらされていたことも本章で確認されている。

第5章は音律の問題にもつばらあてられている。18世紀の西洋音楽においてはどの音律を使用すべきかというのは依然として激しく議論が戦わされていた点である。ラモーは前作『新体系』においては中全音律の採用を主張していたが、『和声の生成』に至ってそうした自身の以前の主張を改め、平均律を唱道するようになる。一般に平均律は遠隔調転調の必要性のために要請されたと認識されている向きもあるが、ラモーにとっては器楽と声楽のアンサンブルの際に必然的に生じる音程間のズレが懸案であり、この問題克服のために結果的に平均律にたどり着いたと見るのが妥当であり、遠隔調転調はその延長線上で捉えられていることがこの章で確認される。

第6章では二重用法という、和声学におけるラモーの新機軸が考察の対象になっている。ラモーの和声理論は基礎低音が5度の上下動を基本とすることで音楽が成立することになっているが、現実的には低音の5度の上下動のみでは音楽現象すべての説明がつかず、より広い、より柔軟な低音の進行の必要があった。それは『和声論』以降のラモーの懸案であったわけだが、ここでラモーは二重用法という概念を介在させることによって、基礎低音の声部に位置すべき基音をさらに増やすことができるという認識を『和声の生成』で提示し、後の機能と声のあり方への端緒を開いた。

第7章では理論と実践の関係が扱われている。ラモーにとってこの両者は直接の影響関係にあるものではないが、『和声の生成』においていくつかの実例や伴奏に関して言及されているのは、いわば音楽の“応用編”に関わる論点をフォローするために、そうした過去の実作や著作が有効されている点がこの章で踏まえられている。

第8章はラモー理論に寄せられた批判や反論が考察の対象とされている。その目的は、『和声の生成』の読解と考察によって一方的にラモーの主張を摂取・理解するだけでなく、そうした批判や反論と照らし合わせることで、ラモー理論の何が問題視され、どこに困難があるのかを明確にすることである。ラモー理論は科学的立場から見れば決して完全無欠なものではなかったが、しかしそれはある意味近代の宿命であった点が考察される。

第9章では総括として本論全体を振り返り、ラモーによる科学的音楽理論の試みは成功しなかったが、しかし『和声の生成』をはじめとするラモーの一連の理論書群が後の和声学の礎をなし、後世の西洋音楽理論のあり方に決定的な影響を与えたその業績は極めて甚大であり、その影響はまさに現在までも有効に機能していることが確認される。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、ジャン＝フィリップ・ラモアの3冊目の主要著作『和声の生成、あるいは理論的・実践的音楽論』(1737) [以下『生成』] を主な対象として、原テキストの精読に基づいて、彼の「和声理論の核心を総体的かつ詳細に把握すること」を目的としている。

執筆者はすでに、和声理論史の画期をなすラモアの処女作『自然の諸原理に還元された和声論』(1722) [以下『和声論』] と次作の『音楽理論の新体系』(1726) [以下『新体系』] を卒論・修論で扱っている。『和声論』にはまだなかった「倍音」の観点と「サブドミナント」の概念が『新体系』で導入され、その上で学界での認知を得るためにパリ王立科学アカデミに提出された『生成』は、ラモア和声論のある段階の総決算とも言えるものなので、同書を中心に考察が行われるのは意味のあることである。

論文本体は9章からなり、付録として『和声論』と『生成』の全訳が添付されている。つまり、博士論文によくあるような古典的文献の注釈付き全訳という形をとっていない。まず『生成』の目的、構成、位置づけに始まり、『新体系』から『生成』執筆までの経緯と論争、『生成』のテキストの特徴と基本用語解、自然科学(音響物理学)との接点(下方倍音列なる非科学的な概念の問題も含む)、音律(中全音律から平均律へ)、本書で初めて本格的に論じられる和音の「二重用法 double emploi」の検討、理論と実践の関係(実際の音楽作品の分析例、通奏低音理論との関係)、ラモア理論への批判と反論(「和声か旋律か」の問題、「オクターヴの同一性」ひいては「転回」に対する数学者たちの異議、ラモアの「自然の原理」の矛盾、古代以来の数比操作による思弁的伝統と近代的な実験科学の混在、理性志向の体系と「耳」を最終裁定基準とするものの矛盾、その他の未解決の諸問題)が論じられ、最後に総括(外国や後世への影響を含む)が行われる。ラモア以外にも、『百科全書』やルソーなど当時の多数の文献が参照されていることは言うまでもない。

長期にわたる多大な努力をかたむけた労作である。誰もが言及するが必ずしも全文が読まれていない、あるいはその理論史的意義が正確には理解されていないラモアの原典に、真正面から取り組み、当時の理論や思想の文脈に位置づけながら、その新しさと矛盾点、未解決の問題、同時代や後世の「誤読」を確認し、なおかつ重要な2書を初めて和訳したことは、高い評価にあたいする。結論的には、ラモアも結局、和声現象の全てを実証科学的に説明しようとする試みには失敗していること[ただし、オクターヴの同一性や短3度・短三和音の自然的起源などについては未だに未解明]、しかしいわゆる「根音バス」や和音分類の簡素化、和音の機能性など、ラモアの多数の貢献が現代までの和声論のパラダイムとなっていることが指摘される。最も基本的な概念、例えば従来「根音バス」と邦訳されてきた「basse fondamentale」には、「基礎低音」という訳語が提案されている。これは文脈によって、その後普及した「根音 root」の意味にも倍音列の「基音」の意味にもなるので、どう訳したところで異論が出てくるため、唯一の正解は定めがたいが、それなりに納得できる説明がなされている。同様に「下置 supposition」和音も、新しい訳語である。

一方、問題点も少なくない。そもそも上記の結論相当の記述は、近年のTh.クリステンセンやJ.レスターらの指摘の域を超えるものではない。細部には執筆者独自の観点もあるのだが、それらと先行研究の成果との区別が明確でないのは残念である。他分野の古典的名著などからの引用(それはそれで執筆者の学際的教養を示すものだが)も含め、二次文献に語らせることが目立つ。先行研究への批判的視点と執筆者自身の言葉で語る姿勢がもっと欲しいところである。例えば、マールブルクからリーマンに至るまで後世の和声理論はラモア理論の誤解に基づいている、という趣旨のクリステンセンの指摘を無批判に引っ張っているが、これはあくまでもラモアに基準をおいた見方であり、後世の新しい和声観とラモアとは異なる理論構築を必要以上に低く評価することにならないだろうか。訳語の点でもいくつか疑問があるが、特に「son fondamental」を「基音」とするのは、倍音を視野に入れた『新体系』以降ならともかく、「基礎低音」に倣って「基礎音」とでもするべきではないか。18世紀の自然観を問題にするのなら、自然の模倣を論じたCh.バトゥーの『芸術論』(1746)など、当時の模倣美学にも言及することが望ましい。ラモア没後250年(2014)以降に刊行された最新の研究成果があまり参照されていないことが問題にならないか、やや懸念するところである。その他、論述の文体がやや雑であること、文献表記の不統一と文献表の遺漏、全訳に散見される誤訳、ルビの付け方の不統一、原文を併記すべきところなどについては、論文公表までに改善されることが望まれる。

以上のような批判点はあるが、PhD博士論文として優れた水準の学術的成果であると認められる。よって合格とする。なお、2書的全訳は、我が国における和声学の歴史的理解を促すためにも、しかるべき訳注と修正を施した上で、出版されることを期待したい。